

## 青森県域における縄文時代の石器集中について（その2）

齋藤 岳\*

### はじめに

研究紀要第27号で表題のテーマで執筆した（齋藤2022；以降「前稿」とする）が、取り上げられなかつた事例がある（注1）。本稿では①8点の石槍と、欠損する石槍1点、剥片が一括出土した弘前市神原（2）遺跡例（青森県教委2013a）、②珪質頁岩の石材原産地周辺に位置し、剥片・碎片集中地点のある大間町小奥戸（1）遺跡例（青森県教委1993；注2）について考察したい。

①では一括出土の石器の特徴を記述する中で、石質は同一グループの珪質頁岩と記載された（注3）。神原（2）遺跡の石槍と類似した石材を、筆者は以前から注目していた（齋藤2019）、神原（2）遺跡例を出発点として、同一母岩、さらに緩やかな石質のグループわけについて、考えを記してみたい。

②では調査区内の剥片・碎片集中地点だけではなく、土坑の坑底から剥片・碎片の一括出土例がある。いずれも廃棄の可能性があると考え、筆者は前稿で掲載しなかった。明確な廃棄例は除外したとする斎藤（2006）の集成にも本例は記載されていない。筆者の集成は石器集中として行ったものであり、形成意図の有無を解釈することなく、出土の一括性などの現象面を重視した名称を使用した。また、石器集積遺構の論文において廃棄事例にも注目すべきとする見解がある（吉川2022）。廃棄としても何らかの意味を付け加えられる可能性があった事例と考えられるほか、発掘調査報告書（以降、他の遺跡のものを含め「報告書」と略する）では石質によるグループわけを筆者が行ったため再検討する。

最後に、珪質頁岩の母岩別資料における分類（分析）の成否についての筆者の考えを記したい。

### 1 弘前市神原（2）遺跡

#### （1）遺跡の概要

神原（2）遺跡は津軽地方南西部の岩木山東麓に位置する（図1-2）。火山山麓扇状地上に立地するため、在地の有用石材は岩木火山由来の安山岩が中心となる。珪質頁岩のほか、磨石類に使用される花崗閃緑岩などの礫石器素材を含めて搬入石材が多くなる。珪質頁岩は、後述するように本遺跡から20～30km圏内に複数の産地が存在する。比較的近距離の石材搬入地の遺跡と言える（注4）。

#### （2）石器集中の概要

神原（2）遺跡の石器集中の8点の石槍は図化され、丁寧に報告されている。報告書（青森県教委2013a）では白黒写真で掲載されたが、本稿では他の遺跡出土品も含め、石質の特徴が判別しやすいカラー写真で掲載する。また、写真と図の出典は、図中に示したものをぞき、引用・参考文献に示した当該遺跡の報告書によっている。

出土地点周辺は、縄文時代後期の遺物が多いものの石槍は形状その他の観察から縄文時代前期（以降、「縄文時代」を省略する）から中期前半と推定された。筆者も、前稿で取り上げた青森市三内丸山遺跡や蓬田村山田（2）遺跡出土品との類似性から、同様の可能性を考える。出土地点は図2-1左上の写真のように後期の遺物集中地点の南西端にあるものの、別個にとらえることが可能と思われる（注5）。

\* 青森県埋蔵文化財調査センター

本事例で着目したいのは、①石器集中の上下により器種と石質の違いがあること。②前稿で記述した原石産地から離れた遺跡での未成品状態での石槍の搬入事例となることである。③さらには母岩を多数含むことを織り込んだうえで、緩やかなグループ分けを行えば、石材搬入候補地が検討可能となることを示すことができ、④磨石類の石器石材の産出地からも離れているため、珪質頁岩の産地とともに搬入経路を併せて考えられることである。

### (3) 神原(2) 遺跡の石器集中の上下による器種と石質の違い

石器集中については、図2-1上半のように出土状態が図と写真で記録されている。大きく見て①石槍集中部分②その南東に連続する剥片群、③さらに南東の剥片2点、④南の剥片群の4つに区分可能である。中心となるのは、点数が多く石槍という重量品がある①であり、原位置を保っていると考えたい。②は、石槍集中から連続し、剥片のみで構成され①から移動した可能性がある。③・④の剥片群は高い確率で①の石槍集中の上部から移動したものと考える。それは、①には石槍の直上部に剥片があることと、出土地点の写真(図2-1左上)のように、この地点では北から南東へ傾斜があるためである。石器集中に伴う掘り込みは確認されておらず①で石器が密集していることから、当初は皮袋やカゴなど有機質の容器に収納されて①の部分にまとまって存在したと考えたい。

石器を有機質の容器内に置いた場合、石器間の衝突による痛みを一定程度は回避できると考えられる。底部と接する部分に置く場合は石器上部や側面側にも有機質のものを置いて保護することができる。石槍集中部分の①については最上部に剥片があるだけではなく、礫皮付近の残る石槍3点が上部にある。図2-1中段右の写真に明瞭である。礫皮付近を残さない石槍は4点のうち3点が部分的に顔を出しており、最も形状の整った1点(図2-2-15)は1番下にあり、写真に写っていない。

石器集中の一番下から礫皮の無い形状の整った石槍が出土したという事は、当時の人も、それをより重要な物(あるいは欠損を回避したい物)と判断していた可能性を示唆するを考えたい。

類例としては、地域と石材が異なるが北海道勇払郡厚真町ヲチャラセナイ遺跡(図2-1下段右)の剥片石器集中VFTB-03があげられる。ここでは10点の両面調整石器の直上に剥片13点、石核1点、スクレイパー1点などが発見されている。全て黒曜石製であり、一部は産地分析が行われた。両面調整石器3点と剥片2点は赤井川産、スクレイパー1点と剥片1点は丸瀬布産、石核1点は厚和48林班産と産地が複数であった。両面調整石器の上に置かれていた剥片は、石器素材と報告されたが、形状の整わないものが多い。目的(的)剥片と一目でわかる規格性のある縦長剥片とは異なる。それらが両面調整石器という重要な石器の上に置かれていた理由としては、両面調整石器の上部の露出を防ぐ皮等の重し、押さえとしても機能させていた可能性を筆者は考える。神原(2)遺跡の石槍集中部分の上部の剥片も同様の可能性がある。

ヲチャラセナイ遺跡では、大きさと形状が類似した黒曜石製の両面調整石器の剥片石器集中が他に2か所発見されている。一部は産地分析が行われ、VFTB-01では9点の両面調整石器のうち、2点が上士幌産と丸瀬布系、1点が赤井川産であった。VFTB-02では15点の両面調整石器のうち3点が置戸所山産、赤井川産が1点であった。両者ともに一括出土で形状の類似した黒曜石製石器でありながらも、石材産地が異なっていた。各産地周辺遺跡で両面調整石器が加工されたとすれば、標準形が共通認識となっていた可能性がある。産地別では赤井川産が比較的小さい。所山産・上士幌産がより大きいが、原石のサイズが大きい産地であることが背景にあると考えたい。

また、前稿でふれたように両面調整石器は石槍の素材ともなりうる。813点の両面調整石器の出土した北海道上磯郡木古内町大平遺跡の接合資料例では、大きな原石からでも中心部から1点を作り出している。中心部の両面調整石器に相当する部分が空洞になっているものもあった（酒井2019）。大平遺跡の資料の多くが帰属する前期後半から中期前半は、規格性のある両面調整石器、さらに加工が進んだ石槍は、1点につき1母岩が対応するのが基本と考えたい。神原(2)遺跡の石器集中は同様の時期が想定され、石槍だけで8母岩の可能性がある。ヲチャラセナイ遺跡の事例から、一括出土資料が同一産地のものとは限定できないと考えたい（注6）。

#### （4）原石産地から離れた遺跡への完成品に近い状態での石槍の搬入

神原(2)遺跡の報告書では、石槍の先端部の作り出し等の観察から1点（図2-2-15）が完成品で、7点は完成直前の未完成品と判断している。石槍は未完成状態で搬出入される事が多いと筆者は前稿で記載した。しかし、山地雄大が指摘するように、石槍は、完成品に近い状態で原産地周辺遺跡から拠点的集落を中心とした消費地へと運ばれる（山地2022）例が多いとする方がより適確である（注7）。

#### （5）石槍8点の類似石材の採取可能地点

8点の石槍は、表皮の色・珪化状況を除くと筆者が西目屋村川原平(1)遺跡等津軽ダム関連遺跡群の石材に言及した時に「石質グループ1」と記載した石材（齋藤2019）に類似する。これは川原平(1)遺跡等で多数使用されている礫皮付近が灰白色の凝灰岩質で礫中心部が黒褐色の珪質頁岩を総称したものである。礫皮がなく、中心部だけ利用した小型石器（石鏃等）についても、高い可能性で相当すると考えられる物を含めた。石材産地周辺では、類似した石質のものが多く存在する。確実な同一母岩は接合品のみである。遺跡の母岩別資料を考えるにあたっては、通常は石核を最重視して分類する。しかし同質の石材が多い石材産地の遺跡では、表皮及び表皮付近が石質の特徴の一つとなる。石器接合の時に表皮部分が、接合のターゲットとなるため分類手順を逆転させた。神原(2)遺跡の石槍は、表皮に近い部分の色は黄色である。そして表皮に近い部分も珪化している。また、石材産地遺跡では石の珪化の状況をはじめとして石質の変化が大きい。一つの石器においても石の色調が連續性を持って変異するものがある。これは石質グループ3とした石材産地に位置する弘前市沢部(2)遺跡の緑色の頁岩の写真（図4-1上段）からみて一目瞭然である。石の色・狭雑物・石の目・光沢などを正確に記載するのが困難なものを扱う場合、緩やかな（大きな）区分からはじめるのが現実的である。石質グループ1を記載した時は、遺跡間の石質の類似を述べたかった事もあり、括りが大きくなつた。石質も良質（吉川2012のいうBランク）から珪化の弱いCランクまで含まれる。

一方で、石質グループ2として紹介した西目屋村大川添(3)遺跡出土の24点の接合資料は、節理面が2面あり、1母岩で3個体と判断した。通常であれば複数の母岩を想定してよい点数であるが、原石そのものが大きいため、一つに接合できた（青森県教委2014a）。

神原(2)遺跡からは図2-2左下の石器のように表皮の色・珪化状況を含めて石質グループ1そのものといえるものも出土している。中期前半の円筒上層式の竪穴建物跡SI-12の石核（26-15）は円筒上層式期のものと考えられる。遺構外出土の石匙（99-25）は三内丸山遺跡第六鉄塔地区の第IV～VII層（青森県教委1998）の前期後半の円筒下層式期に多い形状である。

表皮付近をもたない黒褐色の石器については、石質グループ1なのか、表皮付近の状況の異なる8点の石槍に近いのかは不明である。石質については、本来は石核など中心部分の特徴を重視すべきで

あり、両者を区分する意義は小さい。以降は、神原(2)遺跡の石槍8点を含めて中心部が黒褐色な珪質頁岩を石質「グループ1+」(グループいちプラス)と呼んで記述を進めることとしたい。夾雜物の多さ、油脂光沢の有無や程度、表皮の色や珪化の度合いによる細類は行わない。石籠(119-9)は、青森県内で後期に見られる形状である(畠山1987:注8)。以上から、神原(2)遺跡では石質グループ1+は、前期から後期までの各時期に用いられた石材といえる。

中心部分が黒褐色でも、線や網目のような模様の入るものなど異母岩と識別できるものは別のグループとして除外する。

かなり緩やかな区分となったが、これにより異なる遺跡間の石材のほか、河川からの採集礫も対比できる。おそらくは、同一母岩脈、同一頁岩(泥岩)層の中での石質の細分に近くなっている。珪質頁岩はノジュールとなり個別の礫になったとしても、形成年代や、構成鉱物、堆積環境、その後の熱(水)や圧力の影響の有無や強弱などの状況が類似する泥岩層であれば、石質は類似するものと考える。

筆者のこれまでの踏査結果によれば、弘前市の位置する津軽地方でも、図3のように石質グループ1+に類似する珪質頁岩は各地で採取できる。

比較的近距離(20~30km)では、川原平(1)遺跡の位置する中津軽郡西目屋村から西に、西津軽郡鰯ヶ沢町・深浦町にかけて大童子層が広く分布する。秋田県の女川層に相当する層である。

図3の上から順に、筆者が撮影した写真について述べる。最上段は西目屋村の津軽ダム上流の岩木川のグループ1+の珪質頁岩の巨塊である。灰白色の表皮部分と黒褐色の珪質頁岩部分が明瞭である。

深浦町では長慶平地区など、吾妻川上流の東股沢川などで珪質頁岩が採取できる。津軽平橋付近では巨大な珪質の岩石がある。礫の下部では、石の目付近にオパールのような白色の部分がある。吾妻川の河口付近では、うすい灰白色の表皮部分を持ち、中心部が黒褐色の珪質頁岩の原石が容易に採取できる。写真には、表皮からの灰白色の部分が中心部に接して筋状に珪化したものを掲載した。

図1-2のように大童子層を中村川、赤石川が貫流するが、その川原のみならず、礫が漂着する七里長浜では、石質グループ1+の珪質頁岩が採取できる。両河川とも河口付近は穏やかな流れであるが、洪水時には、多数の礫が海に流れ出るものと考えられる。七里長浜から岩木山北麓付近の海岸段丘である山田野段丘の段丘礫にも含まれている。特に段丘が侵食されている七里長浜南端付近では、漂着礫の他に段丘礫からも珪質頁岩の供給がある。岩木山北麓の山田野段丘が神原(2)遺跡から最も近いが、段丘を解析する小河川からの採取は効率が良いとは言えない。本稿では、利用されたとしてもマイナーなものとして、詳述しない。

神原(2)遺跡から東に位置する五所川原市の飯詰川は女川層に対比される馬ノ神山層を流れる。ここでもまた、グループ1+の珪質頁岩が採取可能である。弘前市南部の大和沢層の稻刈沢川でも石質グループ1+は採取できる。その他、五所川原市金木の小泊層由来の砂礫層、東津軽郡平内町椿山海岸の浅所層由来の礫の中にもグループ1+は含まれている。

以上から、距離的に近い大童子層のものが、多く含まれると考えるのが自然であるが、神原(2)遺跡への搬出地点までは特定できない。

また、図4-1上段のように、沢部(2)遺跡の緑色の珪質頁岩の表皮の状況はグループ1+と類似している。珪質頁岩部分の緑色の色調のみが、異なるように見える。

緑色の珪質頁岩を、筆者は個人的に下北地方の出土例を知る機会があった。他道県でも各地で使用

されている。新潟県東蒲原郡阿賀町の室谷洞穴（小熊2007）、異形石器であれば群馬県吾妻郡東吾妻町の唐堀沢遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団2022）など各地で散見される。大和沢層のように女川層に相当する各地の地層で、緑色になりうる要因のある地点では、少数ながら産するものと思われる。

弘前市域周辺においては、大和沢層のある沢部(2)遺跡が唯一、原石、石核、剥片を含めて出土数が多い。調査区内では、「検出された沢で転礫や割れた礫として観察されている」（報告書436頁）。弘前市周辺の緑色の珪質頁岩の搬出地は沢部(2)遺跡周辺で採取された可能性が高いと考えておきたい。同質のものは図4-1中段右のように神原(2)遺跡から出土している。同じ岩木山東麓の弘前市の外の沢(5)遺跡、薬師遺跡、そして大鰐町駒木沢(2)遺跡からも出土している。これらの遺跡もまた図1-2の地質図に見られるように近傍に珪質頁岩は産しない。

石質グループ1+は外の沢(5)遺跡（青森県教委2019）、弘前市薬師遺跡など（齋藤2019）からも出土している。それらの遺跡には沢部(2)遺跡付近の大和沢層産の石質グループ1+が緑色の珪質頁岩を伴って搬入された可能性がある。さらには西目屋村の大童子層産の石質グループ1+は単独で神原(2)遺跡に搬入される例の他に、途中で大和沢層のものと一緒になる機会が発生したことも考えられる。以上は、神原(2)遺跡の南側から搬入されたと推定できる例となる。

神原(2)遺跡では、黒曜石の産地分析では、木造（出来島）産、深浦産、北海道赤井川産のものが確認されている。北側の日本海沿岸部（出来島群は前述の山田野層の礫に由来する可能性もある；齋藤2002a）からの経路の方が、深い山を経由することなく搬入が容易である。外の沢(5)遺跡の黒曜石の産地分析では木造（出来島）産と深浦産が確認されている。薬師遺跡では、さらに北海道白滝産のものが確認されている。深浦産のなかでも原石の大きなものが産出する六角沢は吾妻川の河口と近い。七里長浜のなかでも出来島地区より南方が、特に鯵ヶ沢町との境界付近では前述のように段丘からも黒曜石の供給があるため多数採取できる（新渡戸ほか1983）。鯵ヶ沢町や深浦町の大童子層の石質グループ1+の珪質頁岩が黒曜石と同じルートで、神原(2)遺跡の北側から搬入されたと考えたい。

石質グループ1+と同質石材の石器は図2-2右下のように鯵ヶ沢町新沢(2)遺跡、弘前市沢部(2)遺跡、さらには上北郡横浜町林ノ脇遺跡の縄文時代早期前葉の日計式期のブロックにも存在する。林ノ脇遺跡では神原(2)遺跡の石槍と同様に、表皮に近い黄色の部分が珪化しているものも出土している。林ノ脇遺跡の剥片石器は筆者が整理を担当したが、珪質頁岩の石質は旧石器を思わせるような良質のものが多かった。女川層に相当する地層は、東日本の日本海側から北海道にかけて、かなり広域な範囲に分布しており、類似した石材が各地に存在する可能性がある。遊動性の高いと考えられる時期であり、採集地点は岩手県西端部などの遠隔地産を含む可能性もある。

#### （6）礫石器の石器石材の產出地

神原(2)遺跡は、安山岩の岩木火山体の山麓にあり、礫石器の素材礫も搬入品となる（図1下段）。半円状扁平打製石器には板状節理が入る安山岩などが使用される。岩木山東麓でも兼平石、十腰内(1)・(2)遺跡周辺の十腰内石などの産地はあるが一定の距離がある（図1-2）。緑色に変質した安山岩は、第4期火山の岩木山のものとは考えられない。藤倉川層など岩木川上流域の地層に由来する礫の可能性がある（齋藤2019）。花崗閃綠岩は鯵ヶ沢町の菱喰山岩体を供給源として赤石川で、さらには日本海から北上する海流に乗って七里長浜にかけて採取できる。岩木川上流域の西目屋村にも小規模に産する。神原(2)遺跡出土品は形状の整った橢円礫を素材としており、七里長浜産の海岸採取礫由来の可

能性が高い(注9)。

礫石器の素材もまた、遺跡の南側と北側から搬入されたと考えられる。

## 2 大間町小奥戸(1)遺跡

### (1) 遺跡の概要

本州最北端の大間崎に近く、標高約15mの海岸段丘上に位置し、遺跡からは津軽海峡を見渡すことができる。青森県教育委員会が試掘調査(青森県教委1991)の後に、南北2区で本調査し、筆者が報告書の編集・執筆を担当した。

北区では早期中葉の物見台式期と前期前葉の表館式期の、南区では早期末の東釧路IV式期の遺物が多い。遺構は南区で早期末の土坑や集石遺構などが見つかった。土器・石器は時期ごとに分布域・層を異にしており、時期判別の可能な石器接合資料が得られた。遺物量は試掘調査で段ボール箱1箱、本調査で17箱、計18箱である。土器に比べて石器の出土数量が多く、実感として約7割が石器であった。女川層に相当する大間層が遺跡周辺に分布することを背景にした石器製作遺跡と捉えられる(注10)。

### (2) 北区の状況

北区は、石器製作のために場所が利用されたと考えたい。

調査区東側では、物見台式期の接合資料、有茎石鏃、石槍、「珪質頁岩1」とした特徴のある石材の原石、石核、剥片が得られている(注11)。

中央部から西側にかけては表館式期の石器が多数出土した。P-10とQ-10のグリッド境に剥片・碎片集中地点があるほか、接合資料15など石籠製作に関連する資料が得られている(図5-1)。

接合資料16は松原型ではない横形石匙を含む接合資料で、素材剥片は求心的な剥離によるものである。求心的な剥離は、石籠の成形加工でも用いられている。石籠は両面ともに全面加工のものと、裏面は主要剥離面を残し周辺加工となるものがある。両面調整石器の形状をとるものは、石籠製作に関わる成形途中の物と考えたい(図5-1右下の接合資料10は同様の可能性がある。厚みのあるものは石槍、薄い物は両面加工の石匙の未完成の可能性は残るが、本遺跡の表館式期では出土していない)。石器製作遺跡のため、石籠は形状に多様性があり、その完成品と未完成品の区別が難しい(注12)。図5-1の接合資料15は、石籠製作に関するものであり長さ15.1cmの原形状まで接合したものである。剥離の進行とともに小型化する。最後は長さ7.7cmと約半分となり、器体中央で折損している。大きさから、両面加工の石籠に加工することも可能であるが、主要剥離面を最後まで残して、片面加工中心の石籠を志向して加工が進む。石籠のうち、正面が全面に剥離加工され、裏面は周辺加工となるものは、主要剥離面に横方向からの剥離痕跡の残すものが多い。主要剥離面を残すものは原石を分割した時的主要剥離面の平坦さを活かそうとする意識が働くと考えれば、1個体1成品となる。一方、両面が全面加工されている石籠について、前述した縄文時代前期後半から中期前半の両面調整石器と同様に考えうるのであれば、原石をそのまま母岩として1母岩1成品となりやすいと考えたい。

### (3) 南区の状況

南区は第IVd層と第V層から東釧路IV式期の遺構、遺物が出土した。両層をつなぐ接合品があり、同一の文化層と考える。より上層のIVa層から後期初頭の土器が出土したほか、少数の赤御堂式、1点の表館式土器片を除いてすべて釧路IV式期のものである(報告書で東釧路III式期類似と記載した土

器も当該期のものと捉えられる；谷井1999）。炭化物集中地点、焼けた石を含む礫群、配石遺構、土坑3基があり、生活の痕跡がある。

図5-2には第IVd層と第V層の出土品を中心に東鉈路IV式期と判断した石器を掲載した（注13）。

石鏸は五角形に近い形状のものが出土しており（102～104）、土器の右側に置いた。

南区は石籠10点に対して石匙が40点と多い。出土遺物のほとんどが東鉈路IV式期であることから石器器種の構成比は当該期のものに対応していると思われる。図5-2右上の接合資料26・31は上下に打面を転移している。松原型石匙（秦1991）の盛行する時期であり、縦長剥片は石匙素材となる可能性がある。接合資料26には被熱による剥落がみられる（注14）。南区の接合資料は剥片剥離が上下、もしくは上方から行われるものを中心としている。縦長剥片と片面加工への志向がある。石匙は両面加工のものを伴うが多くは片面加工である。北区で非松原型の石匙があり、石籠の多いことと異なっている。

報告書で不定形石器としたもののうち、6-C類は連続的な平坦な剥離をもつ石匙等の未成品の可能性の高いものを分類した。現状でもスクレイパーとして使用可能であり、未成品と特定できない。図5-2中央左端に置いた番号170など南区から35点出土している。

第3号土坑坑底の剥片・碎片集中からは、剥片のほか、松原型石匙破片の可能性のある石器などが得られている。精度が粗いとしたうえで、全出土資料を肉眼的な特徴から20のグループに分類して報告した。南区内の出土品を結ぶ接合資料が得られているが（図4-2右下）、接合先の出土グリッドの情報が少なく、第3号土坑の情報量と非対称なため言及できない（注15）。単純な廃棄品の集積なのか、さらには収納行為の要素を含み、石器製作の時に必要な形状の石材を拾い出せる「溜め」（大場2014、吉川2022）の可能性があるのかは不明である。一定期間滞在したために、土坑坑底への剥片・碎片集中が生じたという推測だけは言えそうである。

## おわりに

神原（2）遺跡は岩木山東麓の遺跡であり、有用な珪質頁岩は遺跡付近では得られないとみてよい。遺跡では石質グループ1+とした珪質頁岩が使用されている。他の石材とあわせて考えると、北方の日本海側と南方の岩木川上流域や弘前市南部の双方からの搬入が予想される。石質グループ1+とした珪質頁岩は、図3のように津軽地方各地の女川層相当層に分布していく特定できない。大きな分類とした場合、結論も大雑把なものになる。新たな切り口を持つ調査者による分析で、記述が厚いものになる事を期待したい。

小奥戸（1）遺跡例からは、原石産地周辺の石器製作遺跡における母岩識別の困難さを述べることができる。剥片・碎片集中地点は、北区で1地点、南区で2地点調査したが、新たな情報の追加ができず、本稿では言及していない。第3号土坑は、記載を試みたが、不明な点が多いままである。

青森県内の珪質頁岩の岩石学的な研究については、三内丸山遺跡（前川ほか2010）や青森県埋蔵文化財調査センター（柴ほか2015）で行われた。一方、大平山元遺跡群に関連して2010年代から外ヶ浜町教育委員会の担当者による河川での調査（駒田2011）や岩石学的な調査（佐々木ほか2019）が続いている。その調査により、大平山元遺跡群から距離の近い小泊層の珪質頁岩は、同じく女川層相当の下北半島蒲野沢層、秋田県三種産、山形県最上川産のものと化学組成範囲が一致しており、正確な判別は困難であることが指摘されている（佐々木ほか2019）。これは、岩石薄片を顕微鏡観察し、玉髓質の石

英タイプ(Dタイプ)の珪質頁岩が他のタイプのように広範ではないものの、東北地方各地に小さなまとまりを持って産するという秦(2007)の記述とも矛盾しない。

岩石学的な調査も現状では、産地推定の明確な根拠とならない。

縄文時代では、珪質頁岩は産地・石器石材としての使用量が多く、基本となる肉眼による分類については目的を考え抜いて整理する事、その信頼性を明示することが重要となる。

珪質頁岩の石質分類については、目的が①一括出土品の特徴を記すためか、②石器製作技術を調べるための接合資料を得るためか、③接合資料を得たうえでブロック間の形成時間の前後、同時性、関係を調査するためか(接合資料から同一個体の識別有効度を設定し、信頼性を明示しようとする研究(吉川2003)は、それを視野に入れた研究例である)で、方法や精度が異なる。実践例としても④複数の母岩を含むことを前提としながらも、根拠や信頼性がわかるような丁寧な記載と共に石質類型を設定し、類型ごとの石器製作や組成等を検討する例(佐々木2007)、⑤採取地点の集落間での共有や石材の分配を考える例(筆者は、円筒下層a式期の青森市三内丸山遺跡で多く使われている珪質頁岩と類似した石材が青森市大矢沢野田(1)遺跡で使用されていることから推定した;齋藤2002b)、⑥石器製作遺跡から搬出遺跡への動きを見る例(齋藤2019の石材グループ1)、⑦遺跡出土の石材から産地を考える例(本稿の石材グループ1+)では求められる精度が異なってくる。

珪質頁岩の母岩別資料の分類は、特に縄文時代の資料体では、その信頼性を充分に示すことは難しい。全ては目的(問)に対する答の根拠とできるレベルの信頼性が示せるかが分類(分析)の成否を決めると筆者は考える。

これまでの研究史を踏まえて、試行錯誤して生まれた報告・研究事例の中から、今後の研究史を方向付けていく新たな発想が生まれることを期待したい。

本稿を作成するにあたり、報告書作成時の状況など、調査・報告書担当の鈴木和子氏の御教示を得た。記して、感謝申し上げます。

(注1)八戸市長七谷地貝塚(長七谷地8号遺跡第3号竪穴住居跡;早期末の早稻田5類期)でピット内に70点の剥片がぎっしりと詰まった状態で出土し、接合資料2点(八戸市教委1982)、八戸市売場遺跡DS57グリッドの剥片類272点・6母岩・接合資料5点(青森県教委1985)、三内丸山遺跡における事例(齋藤2015)等がある。西目屋村水上(2)遺跡のSK14は一括出土の記載が無いが20点の半円状扁平打製石器と9点の磨石・凹石が出土し関連事例といえる(青森県教委2013c)。

(注2)遺跡名の「小奥戸」は現在、住所表記等の標準名称の「こおこっぺ」の呼称となっている。試掘担当者から「こごっぺ」と読む旨伝えられ、現地でも通用したので報告書の表紙にその仮名を振った。小奥戸川に現在も架かる旧国道の小奥戸橋は「ここつぱ」と表記されている。呼称の搖れが存在する。

(注3)剥片等の接合は報告されていない。8点の石槍については、図2-2の15と21のように、一見して、異なる石質に見えるものを含む。それらは報告書では同一母岩と記載された。16・17のように間をつなぐ色調や、部分ごとに異なる色調の石槍があり、報告書で紹介されていない剥片を含めて出土した石器全体を捉えたうえの判断と思われる。筆者は、五十嵐彰(2002)が述べる複数の母岩を含むが識別ができない「同一母岩分類不可能資料体2」であると考える。報告書刊行時の諸般の事情が厳しいものであり、用語を熟慮できる状況になかったためと推測する。また、母岩という名称は、文化層をまたぐものにも使用される例があり(五十嵐1998)、認識にゆれ幅があることが遠因と考える。

(注4)図1-2を見ると神原(2)遺跡の南側に肌彩色の段丘が分布する。岩木川上流の安山岩や、大童子層・大和沢層由来の珪質頁岩が段丘礫として含まれていると考えられる。しかし小形となる点と採取の非効率性から、考慮しないものとする。遺跡から岩木川は近いが、中流のため川幅は狭く、水量と深さがある。岩木川からも有用礫の選別と採取は、難しい。

- (注5) 石器集中が前・中期のものとすれば、後期の人は、石槍を利用しなかったというよりも、年月の経過により土や草木に被覆されて認識できなかった可能性がある。なお、事例は少ないものの、後期以降にも類似した形状の石槍はある。しかし、一括出土例を知らない。
- (注6) 北海道奥尻島の砥石遺跡(中期)の石槍集中では頁岩製4点、黒曜石製10点の石槍集中がある。写真では赤井川産黒曜石に特徴的な球顆が入るものと、球顆の無いものがある。全て有茎で先端部は尖っていて形状は類似するが、黒曜石を含めて複数の産地のものが入ると考えたい。
- (注7) 山地の記述は遺跡出土資料を基にしている。石槍集中からも、完成品に近い状態まで原産地周辺遺跡で仕上げたものの流通が主流と思われ、整合している。産地から離れた地域で両面調整の石器を押圧剥離で石槍まで仕上げる熟練した技術保持者の存在は、拠点的な集落を除くと、あまり想定できない。両面調整石器の形状での移動・流通も一定数は存在したと考えられるが、変形・消費の結果として確認できないものが多いと思われる。ヲチャラセナイ遺跡での両面調整石器の集中出土例は、その存在を示唆している。
- (注8) 畠山の記載した大石平型石籠に類似する。その記載に先行して、橋本(1984・1986)は関東地方の段間型籠状石器の類例として青森県内の後期の遺跡で出土すると記している。
- (注9) 弘前市大森勝山遺跡の環状列石構成礫にも、花崗岩類の形状の整った楕円礫が使用されている(齋藤2013)。同遺跡の最近の調査では、珪質頁岩の石質グループ1の出土が報告されている(弘前市教委2022)。筆者は、北の日本海側と南の弘前市南部(さらにいえば西目屋村など岩木川上流域や大鰐町など平川流域)とを結ぶ役割を果たしていたのが岩木山東麓と考えている。津軽平野が近く、深い沢は無い。平野を見渡せるため道に迷うことでもない。岩木山東麓に位置する弘前市十腰内(1)・(2)遺跡、大森勝山遺跡、薬師遺跡などの大規模な、あるいは特別な遺跡形成の基盤となったと考えている。平野と接する部分にも、つがる市石神遺跡や神原(2)遺跡が位置する。岩木山東麓は標高20m～160mまで帶状に各時期の遺跡が分布する。
- (注10) 小奥戸(1)遺跡出土土器は、東鉋路IV式(谷井1999、遠藤2008)、表館式(谷井1999、吉田1995)の良好な資料として引用され、続縄文時代遺跡(後北C2-D式；本州の後北式出土遺跡として引用多数)、土器片錐(福田2007、工藤2007)の集成に取り上げられ、擦文土器は下北半島出土品として分析試料になった(松本2004)。石器は図が多く、バランスを欠く。これには調査と整理の経過が関係している。先行して調査した北区では全面表土除去の前に調査したN-9グリッドから図5-1-接合資料16の石匙が出土した。当初はブロック相当と扱ったため、箸を目印に立て、遺物出土状況写真で記録している(図4-2右上)。遺物量が少なく、表土から石器出土層まで浅かった。また、南区での先行調査部分から出土した図5-2の接合資料11を現場で接合することができた。そこで北区の石匙を接合できると考えたうえで調査した。その後、図4-2左下の写真のように南区では、調査区西部の土層が想定よりも厚かったうえ、遺物量も予想を上回った。そのため調査後半には、北区の剥片集中地点は範囲を括っての一括取り上げ、南区ではグリッドを小区画に区切っての一括取り上げとした。調査開始、中盤、終盤で取り上げの精度が異なり、ブロック(遺物集中地点)の設定を逡巡した。接合の区切りをつけた時点でも、さらにブロックを結びつけうる石器接合を確信できたため、ブロック設定の意義が変質(低下)した。筆者は、石材産地の石器製作遺跡としての性格を明らかにし、遺跡と出土資料の価値を高める手段として石器接合を行った。しかし母岩別資料不可能資料体といえるような肉眼的特徴が似通ったものが多く、接合と図化で力尽きてしまった。接合資料は、当初は北区の物見台式期、次に表館式期と、区域別、時代別に図版を作成したが、錯誤により北区の図の中に南区の接合資料11を入れ、修正が出来なかつたため南北を一括した。また、縦割れや横割れ(五十嵐2002)など製作時の事故品の可能性のある折損品でも距離を持って接合したものは、接合資料として扱っている。それは前述の接合資料11のように折れ面から再加工が行われているものがあるためである。また、図4-2の第3号土坑の剥片とZ-33グリッド出土の石錐からなる接合資料38は接合した状態が完形品なのか、上部の剥片を割りとりして石錐のみで完形品とすべきなのか判断できなかった。
- (注11) 報告書で珪質頁岩1としたものは玉髓質で灰白色の風化部分が石の中にも入り込むものであり、報告書171頁(写真25)に剥片等を掲載した。原石は、北区の物見台式期の遺物分布域のJ-7グリッドの礫層(図4-2左上)の中からも出土している。この石材に関しては、多くは、原石の縁辺から求心的に剥片を採取している(報告書掲載の接合資料3～8)。横浜町林ノ脇遺跡の早期日計式期の出土品に類似するものがあり、図4-2中央左に掲載した。
- (注12) ここでいう未成品は成品となっていない状態をさし、いわゆる失敗品を含むものである。石器は土器と異なり、再加工により変形を繰り返す。失敗品は、作り手の意図を石器観察者が読み込んでのことであり、一致しているかは不明確である。小奥戸(1)遺跡においても、折れ面から再加工された石器(前述の接合資料11)が出土している。報告書では、折損部分を含む90度に近い角度での剥離が目立つたため「調整A」と仮称し観察表等に記載した。作り直しのために両極打法が多用された結果の可能性がある。失敗品と思われる折損品も、その後、素材へと転化しうる。石器製作遺跡では、細部加工が少ないものは、加工の省略か、加工途中なのかの判断が難しい。

- (注13)図5-2図には、層不明の両面加工の石匙(破片)と松原型石匙の計3点は番号部分を四角で囲って図示している。いずれも函館市豊原4遺跡の土坑墓P-100など東釧路IV式期には出土しており、同一時期のものとして扱った。両面加工の石匙については仮称北斗型ナイフとして前期前葉の北海道の縄文式期のものが紹介されている(澤1987)。南区の出土品よりも、つまみ部が大きく大きい。その点では、形状は若干変化するが三内丸山遺跡第六鉄塔地区のような円筒下層式期の両面加工の石匙に類似するように見える。両面加工の石器として両面加工の石槍・石鎧と親和性がある。円筒下層式期の函館市八木A・B遺跡の厚みのない両面調整石器については、その中に石匙への変化前のものを含む可能性を筆者は考える。また函館市域では珪質頁岩原産地の戸井地区の蛭子川2遺跡に注目したい。蛭子川2遺跡は東釧路IV式期と表館式相当時期(石川野式期)を主体とする遺跡であるが、遺物集中ブロックがあり、接合資料が得られるなど石器製作関係資料が多数出土している(戸井町教委1989)。小奥戸(1)遺跡の南区、北区双方の石器群と対比できる資料体といえる。そして東釧路IV式期の遺物集中ブロックNO.6からは小奥戸(1)遺跡の図5-2-102～104と類似した形状の石鎧が出土している(函館市豊原4遺跡の土坑墓P-100、豊原2遺跡からも類似形状の石鎧が出土している)。
- (注14)南区を中心に、焼けに伴う剥落のある剥片が多数出土した。報告書では、珪質頁岩の加熱処理は考え難いとして、廃棄の様相を示すものとして記載した。しかし、御堂島正による珪質頁岩の加熱実験とともに分析が行われ、有効性が報告された(御堂島2022)。筆者は、現在は、つまみ部が小さく念入りな剥離加工が行われる松原型石匙などの製作の時に加熱処理を行った可能性を考える。
- (注15)付図の遺物分布図の元図には、掲載外石器の接合も記入していたが、年数が経過し、今は無い。小奥戸(1)遺跡の報告書には、自分自身でも語りえないものがある。今回、調査と整理の経緯を文章化した。そして、多くの方からご協力と御寛恕いただいた事に、改めて深く感謝したい。

## 引用・参考文献

- 青森県1998『青森県の地質』  
 青森県2017『青森県史 資料編 考古1 旧石器 縄文草創期～中期編』  
 青森県教育委員会1985『壳場遺跡・大タルミ遺跡』県埋文第93集  
 青森県教育委員会1991『大間原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書』県埋文第139集  
 青森県教育委員会1992『青森県遺跡地図』  
 青森県教育委員会1993『小奥戸(1)遺跡』県埋文第154集  
 青森県教育委員会1999『三内丸山遺跡VIII』県埋文第230集  
 青森県教育委員会 2013a『神原(2)遺跡』県埋文第530集  
 青森県教育委員会 2013b『駒木沢(2)遺跡』県埋文第532集  
 青森県教育委員会 2013c『水上(2)遺跡II・水上(3)遺跡II』県埋文第528集  
 青森県教育委員会 2014a『大川添(3)遺跡』県埋文第544集  
 青森県教育委員会 2014b『上新岡館・薬師遺跡』県埋文第545集  
 青森県教育委員会 2016『川原平(1)遺跡II』県埋文第564集  
 青森県教育委員会 2018『沢部(2)遺跡』県埋文第594集  
 青森県教育委員会 2019『外の沢(4)遺跡・外の沢(5)遺跡』県埋文第600集  
 厚真町教育委員会2013『厚真町ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡(1)』厚幌ダム建設事業に伴う発掘調査報告書5  
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2022『唐堀遺跡(2)-縄文時代編-第4分冊 写真図版編』第707集 PL452-14  
 奥尻町教育委員会2002『砥石遺跡』  
 三内丸山遺跡センター 2022『特別展 縄文マジカル+』  
 函館市教育委員会2003『豊原4遺跡』  
 函館市教育委員会2010『豊原2遺跡』  
 八戸市教育委員会1982『長七谷地遺跡発掘調査報告書 長七谷地2・7・8号遺跡』  
 南茅部町埋蔵文化財調査団1992『八木B遺跡』  
 南茅部町埋蔵文化財調査団1995『八木A遺跡II ハマナス野遺跡』  
 弘前市教育委員会2022『史跡大森勝山遺跡発掘調査報告書-史跡整備事業に伴う遺構確認調査-』105頁  
 戸井町教育委員会1989『蛭子川2遺跡』  
 阿部朝衛2007「石器のメンテナンス(石鎧)」『縄文時代の考古学 6 ものづくり-道具製作の技術と組織-』同成社  
 五十嵐彰1998「考古資料の接合-石器研究における母岩・個体問題-」『史学』第67巻3・4号  
 五十嵐彰2002「石器資料関係論-旧石器資料報告の現状(III)-」『研究論集』XIX 東京都埋蔵文化財センター  
 遠藤香澄2008「縄文系平底土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション

- 大場正義2014「高瀬山遺跡縄文中期末葉の石器資料集積遺構出土資料の技術学分析-縄文石刃技術と短形剥片剥離技術の動作連鎖、そして“コドモ”的発見-」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』第6集
- 小熊博史2007『縄文時代の起源を探る 小瀬ヶ沢洞窟・室谷洞窟』新泉社
- 工藤司2007「青森県内の土器片錐」『青森県考古学』第15号
- 駒田透2011「遺跡群と蟹田川の石材」『大平山元』外ヶ浜町教育委員会
- 齋藤岳2002a「青森県における石器石材の研究について」『青森県考古学会30周年記念論集』
- 齋藤岳2002b「石器」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県
- 齋藤岳2013「弘前市大森勝山遺跡の環状列石構成礫について」『青森県考古学』第21号
- 齋藤岳2015「三内丸山遺跡南盛土の剥片・碎片集中地点の石器について」『特別史跡 三内丸山遺跡年報』-18-
- 齋藤岳2019「津軽ダム関連遺跡群の縄文時代石器・石器製作」『研究紀要第』第24号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 齋藤岳2021「青森県域における玉髓等の石器石材の利用について」『研究紀要第』第26号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 齋藤岳2022「青森県域における石器集中について」『研究紀要第』第27号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 斎藤慶吏2006「青森県内における剥片集中遺構について」『新田遺跡II』青森県教育委員会 県埋文第410集
- 酒井秀治2019「両面調整石器と接合資料-木古内町大平遺跡の石器製作-」『北の発掘物語 遺跡と遺物は語る』（公財）北海道埋蔵文化財センター
- 佐々木雅裕2007「石質類型資料別の石器組成と剥片生産の様相」『潟野遺跡II』青森県教育委員会 県埋文第431集
- 佐々木実・柴正敏2019「大平山元遺跡出土頁岩の蛍光X線分析」『史跡大平山元遺跡』青森県外ヶ浜町教育委員会
- 澤四郎1987「北斗遺跡第I地点の石器」『釧路の先史』釧路市
- 柴正敏・諸星哲也2015「青森県埋蔵文化財調査センターにおける石材標本作成の意義」『研究紀要第』第20号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 谷井彪1999「東釧路系土器へのモノローグ」『研究紀要』第15号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 新渡戸隆・鈴木克彦1983「日本海七里長浜の黒曜石原石採取踏査」『考古風土記』第8号
- 野口淳2007「遺跡の空間分析」『ゼミナール旧石器考古学』同成社
- 根本直樹・鎌田耕太郎2004「表層地質図」「土地分類基本調査 川原平」青森県農林水産部農村整備課
- 畠山昇1987「大石平型石竈について」『大石平遺跡発掘調査報告書III(第二分冊)』青森県教育委員会 県埋文第103号
- 橋本勝雄1984「特殊な竈状石器についての一考察(その一)-「段間型竈状石器」の提唱-」『太平臺史窓』第3号 大塚書店
- 橋本勝雄1986「特殊な竈状石器についての一考察(その二)-「段間型竈状石器」の提唱-」『太平臺史窓』第5号 大塚書店
- 秦昭繁1991「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙- 松原型石匙の分布と製作技術について-」『考古学雑誌』第76卷第4号
- 秦昭繁2007「珪質頁岩の供給」『縄文時代の考古学6 ものづくり-道具製作の技術と組織-』同成社
- 福田友之2007「津軽海峡域における土器片錐-下北半島発茶沢(1)遺跡の資料をもとにして-」『三浦圭介氏華甲記念考古論集』
- 前川寛和・大塚和義・請闇秀彦2010「岩石考古学の構築：岩石学の手法を用いた縄文石器の解析」特別史跡 三内丸山遺跡 年報13
- 松本建速2004「向田(35)遺跡出土土器の成分分析」『向田(35)遺跡』青森県教育委員会 県埋文第373号
- 御堂島正1993「加熱処理による石器製作-日本国内の事例と実験的研究-」『考古学雑誌』79-2
- 御堂島正2022「珪質頁岩の加熱処理- 剥離の性質の改善に関する実験研究 -」『古代』第149号
- 山地雄大2022「東北地方北部の石材環境をめぐる円筒下層式期の石槍生産」『特別史跡三内丸山遺跡研究紀要-3-』
- 吉川耕太郎2003「個体別資料分析の再検討-琴丘町小林遺跡における縄文時代中期後半の石器群-」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第17号
- 吉川耕太郎2012『シリーズ「遺跡を学ぶ」083 北の縄文鉱山 上白川遺跡群』新泉社
- 吉川耕太郎2014「多様な石器を生み出す石材・頁岩の多目的利用-東北前期と中期末～後期前葉の事例を中心に-」『季刊考古学・別冊21 縄文時代の資源利用と社会』雄山閣
- 吉川耕太郎2020「秋田県南部内陸域における珪質頁岩産地分布調査-石器石材産地特性の理解に向けて-」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第34号
- 吉川耕太郎2022「なぜ石器は集積されたのか-秋田県の石器集積遺構理解のための一試論-」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第36号
- 吉田秀享1995「縄文土器」『相馬開発関連遺跡調査報告書III』財団法人福島県文化センター 福島県文化財調査報告書第312集

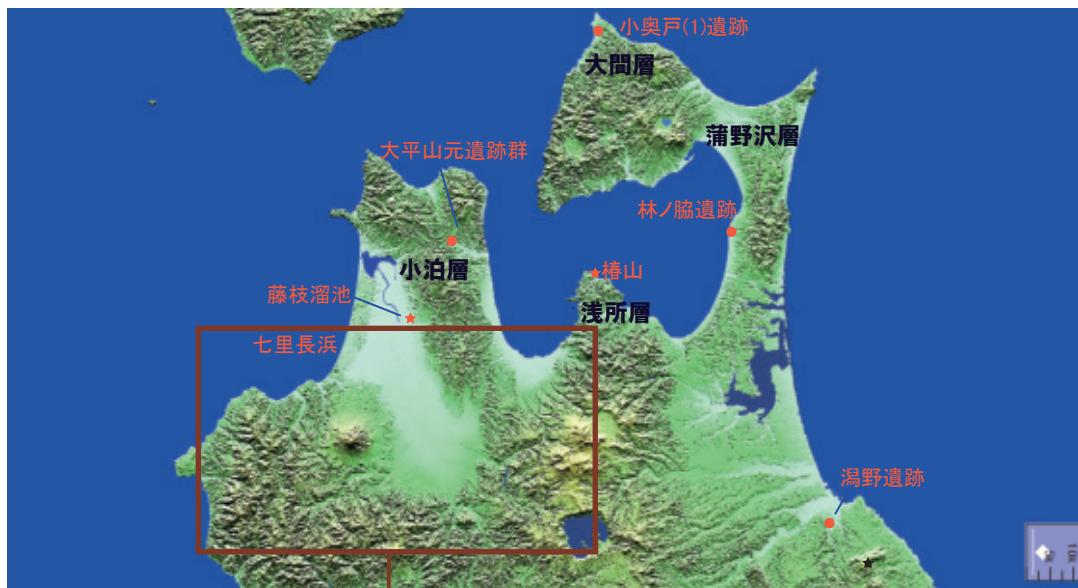


図1-1 関係遺跡等

カシミールを加工



図1-2 地質図と関係遺跡・地名

● 遺跡 ★ 地域

青森県の地質 (青森県1998) を加工

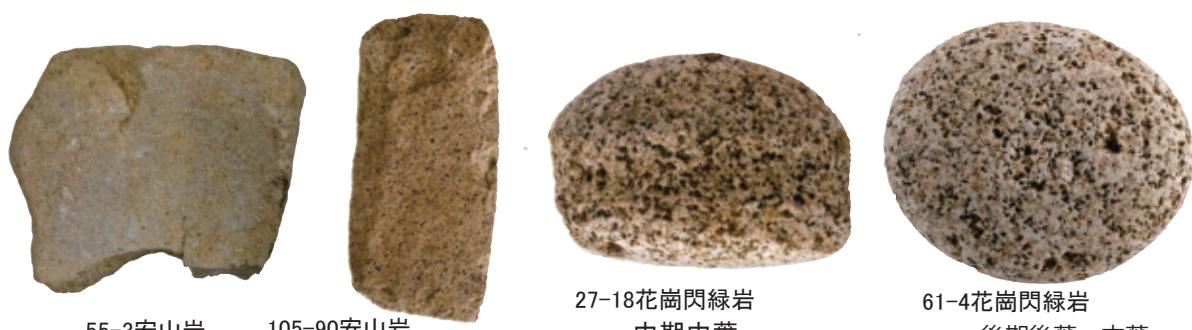
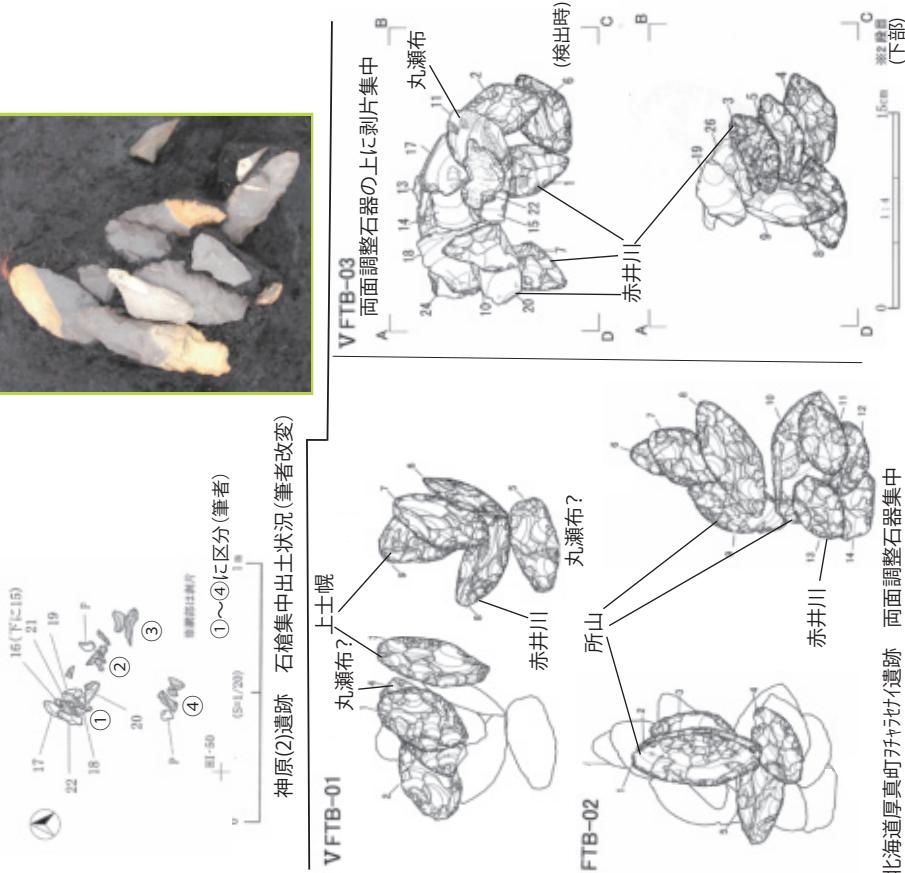


図1-3 神原(2)遺跡の安山岩・花崗閃綠岩製石器 数字は報告書図番号



縄文後期遺物



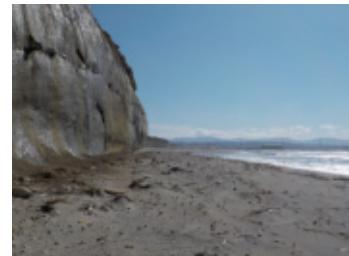


西目屋村 岩木川(津軽ダムの上流部)大童子層の珪質頁岩



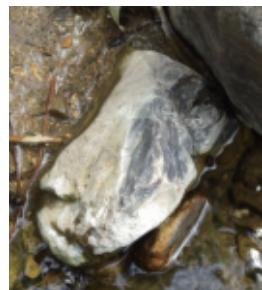
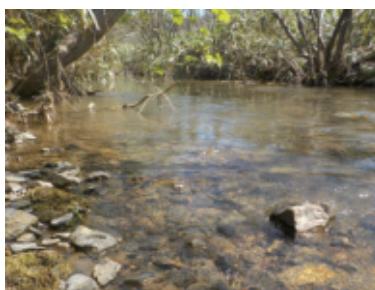
深浦町 吾妻川上流東股沢川の大童子層の珪質岩塊

オパール? (左の岩下部:写真範囲外)



深浦町 吾妻川河口付近と珪質頁岩

つがる市 七里長浜と珪質頁岩(左の崖は山田野段丘)



五所川原市 飯詰川の馬ノ神山層由来の珪質頁岩

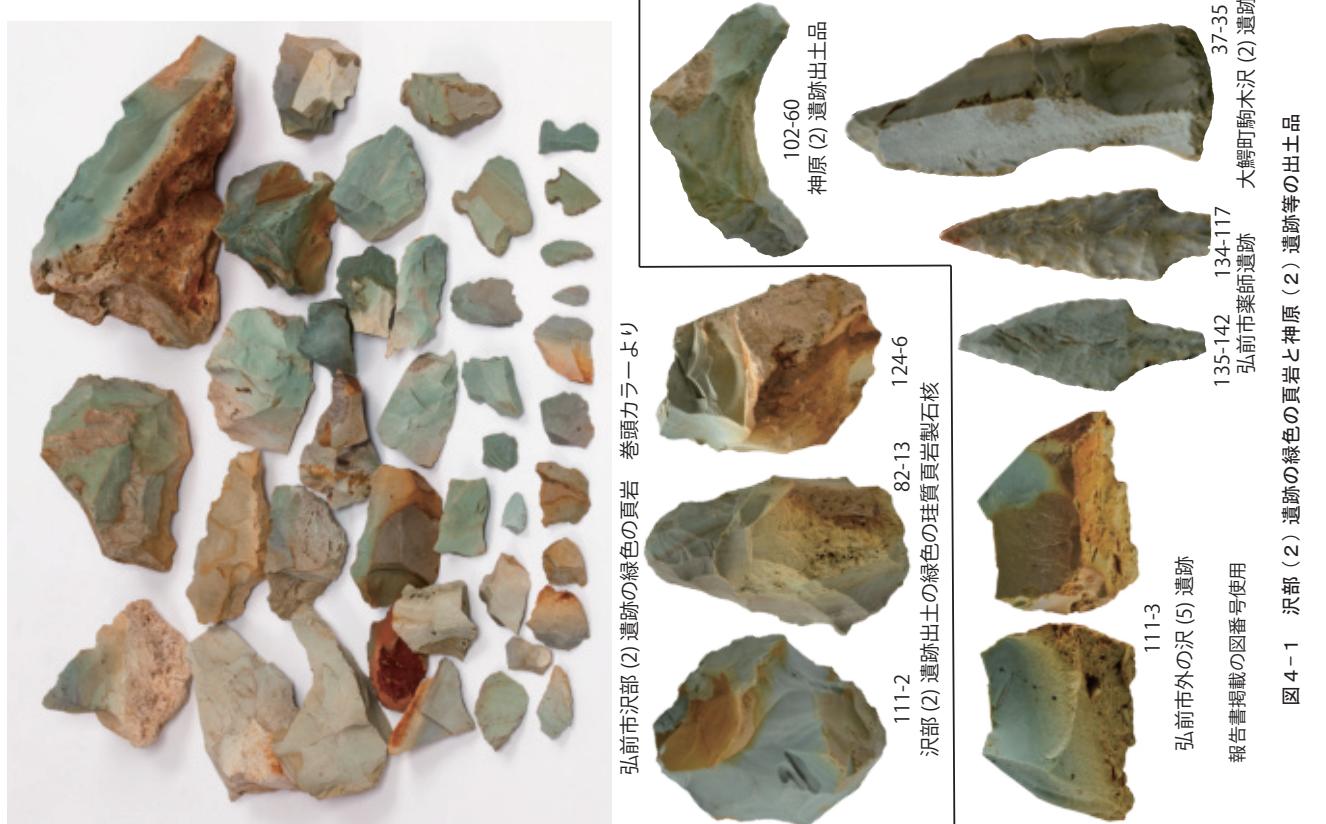
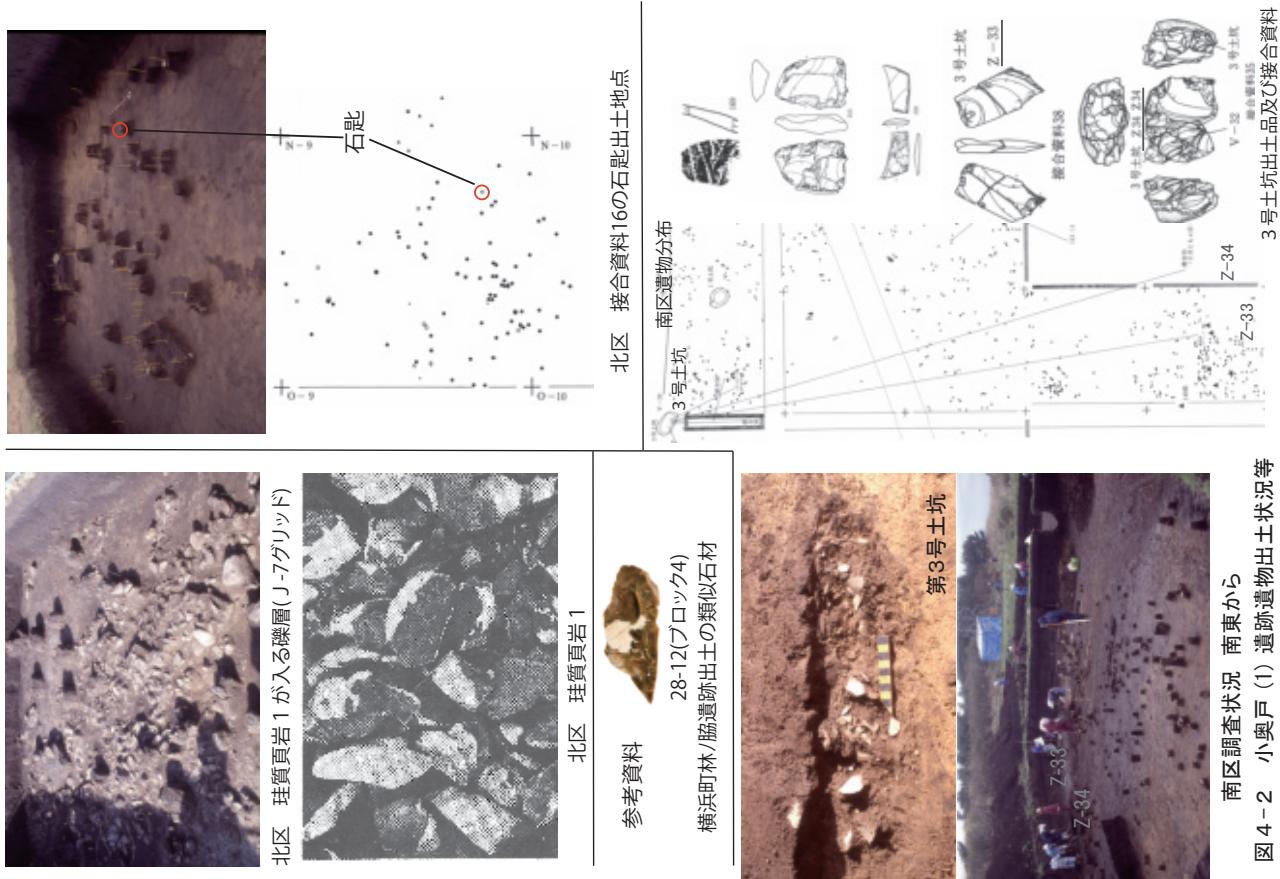
弘前市 稲刈沢川と珪質頁岩(大和沢層)



五所川原市金木 藤枝溜池南岸の珪質頁岩(小泊層由来)

平内町 椿山海岸の珪質頁岩(浅所層)

図3 津軽地方南部の珪質頁岩産地



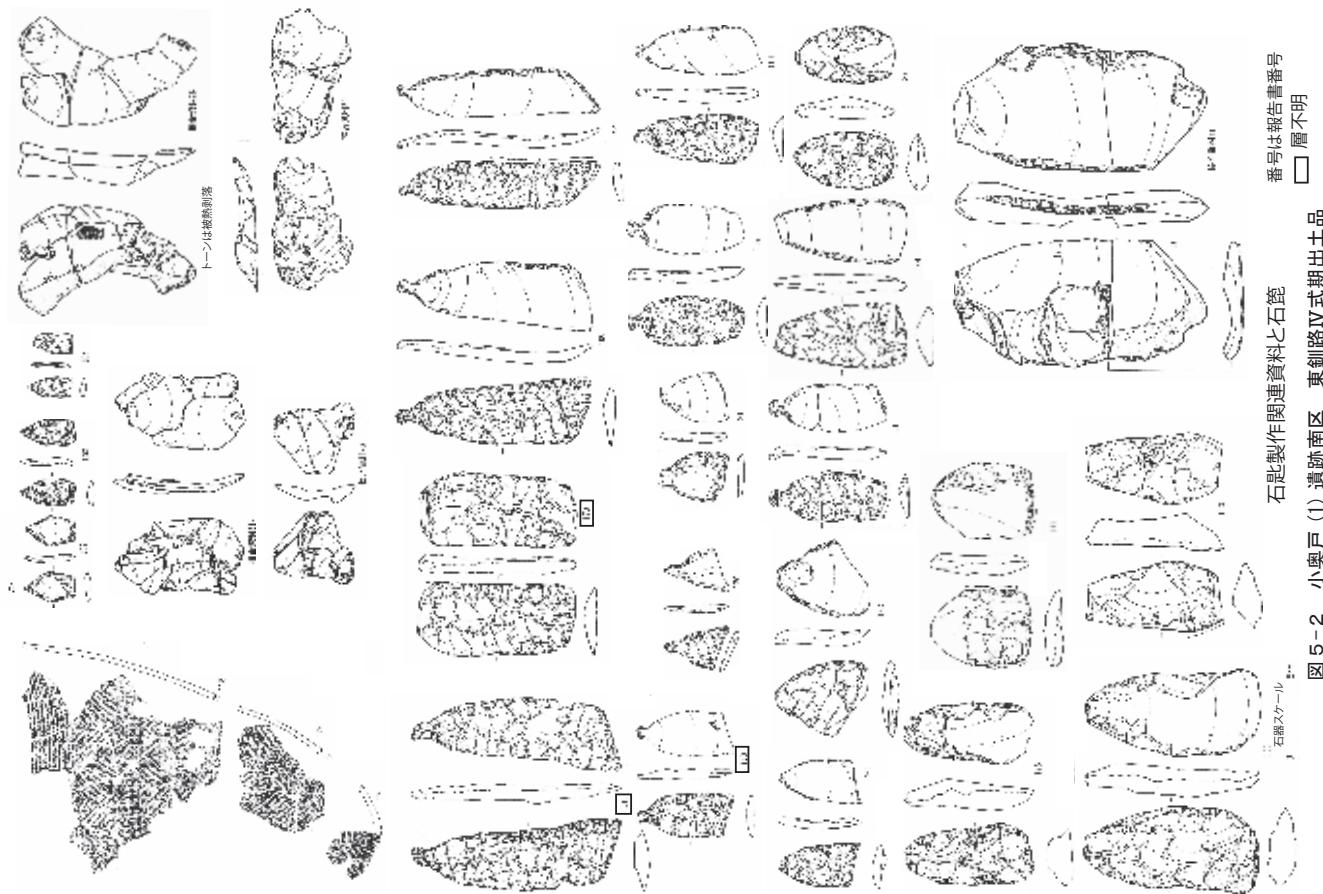


図5-1 小奥戸(1)遺跡北区 石匙・石斧製作関係資料等 番号は報告書番号

